

<p>1. 教育方法の実践例</p>	<p>平成 2～14 年</p> <p>平成 9 年</p> <p>平成 11～14 年</p> <p>平成 11～14 年</p> <p>平成 14 年</p> <p>平成 17 年</p>	<p>主に「国際コース」において、総合的コミュニケーション能力を高めるため、独自の授業および諸活動を実践。(常葉学園高等学校)</p> <p>(1) 海外語学研修の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他国の学生に混じって能力別クラスで受講 ・他国の学生をルームメイトとするホームステイ ・各種自主制作教材による事前研修の充実 ・研究発表、エッセー等による事後研修の充実 <p>(2) 語学キャンプの充実</p> <p>海外語学研修に向け、県より ALT6～8 名を派遣してもらい、本番さながらの対話練習の場を提供。</p> <p>(3) 校内スピーチコンテストの推進</p> <p>(4) 各種スピーチコンテスト・エッセーコンテストの出場促進とその指導。受賞者多数。</p> <p>(5) 進学実績、英語検定実績の伸長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・慶応、上智など有名校への進学者を輩出 ・英検準 1 級合格者 3 名を輩出 <p>(6) イングリッシュ・ライブラリーの整備</p> <p>(7) 「外国事情」を中心とする人間教育に通ずる英語教育の実践 毎年実施される授業アンケートで高評価。</p> <p>(8) 国際コース・ジャーナル『JOIN』(平成 8 年より『国際コースで学ぼう!』に改名)を編集。</p> <p>(9) 異文化講座として「クリスマス・プログラム(毎年)」「ハロウィーン」「青年海外協力隊員に聴く」などを企画、運営。</p> <p>独自に、老人福祉施設での介護体験プログラムを開始。次年度以降は高 2 全学年で実施。</p> <p>図書館の重要性に配慮し、司書教諭免許を取得し、図書館の刷新、改善にあたる。</p> <p>ビデオ・ライブラリーの整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図書館所蔵のビデオばかりでなく TV 番組や映画など、授業や諸活動に利用できるビデオ、DVD を、教科の枠を超えて、整備。 <p>文部科学省の助成を受け「特色教育プロジェクト」を推進。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリジナル教材・教具 9 種の開発 ・CD-ROM『ここはの英語教育』作成 <p>英語英文科の新企画として「イングリッシュ・キャンプ 1 & 2」を実施。学生数人に 1 人の割合で、英語の母語話者である外国人講師を配置。キャンプ 1 では、空港や機内での会話のシミュレーションを中心に、1 泊 2 日のキャンプ 2 では、自己表現活動・プレゼンテーションなどを行った。</p>
<p>2. 作成した教科書、教材</p>	<p>平成 10 年</p> <p>平成 11 年</p> <p>平成 12 年</p>	<p>各種自作教材の作成</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 『異文化理解おもしろクイズ』 (2) 『ことわざカルタ』 (3) 『アメリカ人の知らない英語カルタ』 (4) 『Bowwow カルタ』 (5) 『異文化理解おもしろクイズ 100』 (6) 『イギリス研修/sightseeing カルタ』 (7) 『イギリス研修/Art カルタ』 (8) 『日本文化紹介カルタ』 (9) 『Emotion カルタ』 (10) 『海外研修会話ハンドブック』(共著) (11) 『常葉っ子の起きてから寝るまでカルタ』(共作) (12) 『TOKOHA SONGBOOK A World of Music』(共著) (13) 『異文化理解おもしろクイズアクティビティー編』

	平成 13 年 平成 14 年 平成 15 年 平成 16 年 平成 17 年	(14)『日本文化紹介ハンドブック』 (15)『常葉っ子の一般常識 Q&A 100』 (16)『基本動詞‘何する’カルタ』 (17)『格言・名言カルタ』 (18)『TOKOHA SONGBOOK 2～Discover the World through Music』(共著) (19)『ことわざカルタ』(株) 栄光より出版される。 (20)『580 のイラストで覚える英語表現集』(株) 栄光より出版される。 (21)『NEW LEGEND ENGLISH II Teacher’s Manual』(共著) (株) 開拓社より出版される。 (22)『NEW LEGEND ENGLISH II 学習の手引き』(共著) (株) 開拓社より出版される。 (23)『NEW LEGEND ENGLISH II 予習ノート』(共著) (株) 開拓社より出版される。 (24)『異文化理解おもしろクイズ』(単著) (株) 開拓社より出版される。 (25)『TOKOHA SONGBOOK 3～A World of Music』(共著) (26)『職業カルタ』 (27)『クリスマス・カルタ』 (28) 作詞作曲『ありがとうの歌』国際交流の際などに感謝の気持ちを伝える歌 (27)『調理法カルタ』 (28)『クッキング用品カルタ』 (29)『ディベート活性化カルタ』 (30)『病気カルタ』 (31)『性格カルタ』 (32)『エクササイズ・カルタ』 (33)『クラスルーム・イングリッシュ・カルタ』 (34)『永倉式線つけ教材』
4. その他	～平成 15 年 3 月 平成 7 年 10 月 平成 8 年 1 月 平成 10 年 1 月 平成 10 年 7 月 平成 11 年 7 月 平成 12 年 1 月 平成 13 年 3 月	進路課『進路の手引き』編集 園芸部、ダンス部、映画同好会、華道部の顧問を務める。 不登校傾向のある生徒、学習意欲の乏しい生徒に対しても、根気よく指導にあたる。 静岡県教育弘済会 研究助成 優秀賞受賞 (財) 金子国際文化交流財団主催 第 12 回「金子賞」受賞 (財) 金子国際文化交流財団主催 第 14 回「金子賞」受賞 日本英語検定協会主催 第 11 回「英検」研究助成論文部門入選 第 48 回読売教育賞 外国語教育 最優秀賞受賞 (財) はごろも教育研究奨励会主催第 14 回はごろも教育研究 奨励賞受賞 第 49 回中村英語教育賞 3 位受賞
職務上の実績に関する事項	年月日	概 要
「英語教育センター」所員としての職務	平成 11 年～	常葉学園大学外国語学部附属「英語教育センター」所員・開所時のシンポジウムでパネラーをつとめる。
	平成 16 年 8 月	常葉学園夏期研修会 外国語科分科会をコーディネート。「英語教育センター」に期待する活動内容に関するアンケートを実施し、その活動の活性化を模索。また、小中連携に向けた検討会に参加。
	平成 17 年 1 月～	常葉学園小中＜英語＞一貫教育推進のため、学園長先生、各学校長、英語教員らと会議を重ねる(6回)。20年以上の実績を持ち、優秀な児童が育っている一方、講師陣が非常勤のためか基本方針のあいまいさのためか、歳月の割には蓄積されたものが少ない小学校の現状、女子校離れ・レベル低下などの問題を抱え、スポーツ中心の募集が展開す

		る常葉・橘両中学校の実情などを考慮しながら、一貫教育の可能性を探っている。橘小学校への専任講師の配置、学校訪問、模擬授業などいくつかの進展は見られている。しかし、歩み寄りには克服困難な壁も少なくない。
	平成 17 年 8 月	常葉学園夏期研修会 分科会 A をコーディネート。 「授業法の改善のために」をテーマに各校の取り組みを紹介していただき、続いて意見交換を行った。また、「英語の授業活性化のための大技・小技」と題して発表。また、ハント先生(本学講師)にも協力を願い、Real Communication の大切さについて強調していただいた。
各種研修会での講演等 各種研修会での講演等	平成 11 年 11 月	第 47 回全国私学教育研究集会 静岡大会 英語科部会 パネルディスカッション「今、人間教育としての英語教育の役割」でパネラーをつとめる。
	平成 13 年 10 月	小中高大、国公立・私立の枠を越えた英語授業の活性化を目指す研究会「達人セミナー in SHIZUOKA」を企画運営。 「これが常葉の英語教育だ！」を講演。参加者は、80 名余。
	平成 14 年 10 月	前年に引き続き、研究会「達人セミナー in SHIZUOKA」を企画運営。「教材・教具の秋祭り！常葉縁日へいらっしやい！」を講演。前年を上回る 90 名以上が参加。
	平成 14 年 12 月	英語教育をおもしろくする会(代表、静岡産業大学長谷川和則教授)にて、「楽しくってためになる‘異文化コミュニケーション授業’」を講演。
	平成 15 年 1 月	e-ステップセミナー(東京)で講演。
	平成 15 年 1 月	達人セミナー in 茅ヶ崎で、講演。
	平成 15 年 6 月	達人セミナー in 東京で、講演。
	平成 15 年 8 月	e-ステップセミナー(京都)で講演。(於、同志社女子大学)
	平成 15 年 8 月	達人セミナー in 鎌倉で、講演。
	平成 15 年 9 月	県立小笠高校産業社会ゼミナールで模擬授業。幼児英語教育、異文化理解などを盛り込んだプレゼンテーション。
	平成 15 年 10 月	県立御殿場高等学校にて模擬授業。幼児英語教育、異文化理解などを盛り込んだプレゼンテーション。
	平成 15 年 12 月	e-ステップセミナー(広島)で講演。(於、広島大学) 『TOKOHA SONGBOOK』の活用法を紹介。
	平成 14 年 11 月	前年に引き続き、研究会「達人セミナー in SHIZUOKA」を企画運営。「カルタは最高！ことわざカルタから簡単手作りカルタの秘密まで」を講演。前年を上回る 120 名が参加。この研修会の様子は、テレビ静岡で放映され、静岡新聞にも掲載された。
	平成 16 年 1 月	e-ステップセミナー(東京)で講演。
	平成 16 年 9 月	達人セミナー in 名古屋で、講演。(於、南山大学)
	平成 16 年 11 月	前年に引き続き、研究会「達人セミナー in SHIZUOKA」を企画運営。「これが常葉の英語教育だ！歌あり、異文化ありのワントピック・マルチ活用法」を講演。前年と同様、多数の方々が参加。当日の様子は、テレビ静岡で教育に関する特集番組として放映され、静岡新聞にも掲載された。
	平成 16 年 11 月	静岡県東部の教職員への便宜を考え、静岡での開催の翌日に、「達人セミナー in MISHIMA」を企画運営。「これが常葉の英語教育だ！達セミ発大技・小技の応用」を講演。
	平成 16 年 11 月	達人セミナー in 神戸で、講演。
	平成 16 年 11 月	常葉学園高等学校との高大連携(土曜講座)を担当。テーマは「比較文化」

		平成 17 年 3 月	静岡県内の英語教育、特に授業力の向上を目指した勉強会「人間形成と英語教育を考える会」を発足。アイセル 21 にて発足記念講演会を企画運営。県中部を中心に 20 余名の英語教育関係者が参加。参加者の熱い思いが、今、教育現場に欠けていると言わざるを得ない「人間性」を英語授業を通じて育むことを掲げた勉強会の発足につながった。	
		平成 17 年 5 月	常葉学園高等学校の土曜講座（人間文化コース 1 年生）を担当。テーマは「異文化理解を促す英語教育で養えるもの」	
		平成 17 年 6 月	常葉学園三校合同授業研修会にて助言講師を務める。リーディングの指導法を工夫した授業者の取り組みを受けて、いわゆる「訳読」からの脱却を図る様々な手法を紹介。	
		平成 17 年 7 月	達人セミナー in 大阪で、講演。	
		平成 17 年 8 月	静岡県西部高等学校英語教育研究会夏期研修会（於、磐田ワークピア）で、講演。演題は「英語教育における異文化理解と人間形成」英語の授業を通して、日本語を含む人と人とのコミュニケーション能力、人間力を高めるという目的論について述べ、さらに、ワークショップ形式で具体的な指導法を紹介した。30 人ほどの先生方が参加していただき、意見交換も積極的に行われた。	
		平成 17 年 11 月	常葉学園高等学校との高大連携授業を担当。テーマは「ポピュラー・ソングから学ぶ英語表現とキリスト教精神」自己の成長に伴う悩みや困難に立ち向かう勇気を与えてくれる作品を選び、その意味と背景にある英語圏の文化・価値観を読み取らせた。高校卒業を間近にひかえた受講者への応援メッセージとも言える内容であった。	
		平成 17 年 11 月	例年通り、研究会「達人セミナー in SHIZUOKA」を企画運営。中高教員を中心に 100 名の参加者があり有意義な研修会となった。また、来年度から静岡市が採択する中学校の教科書が替わることから「中学校英語教科書の分析―諸活動のコミュニケーション・レベルに着目して―」と題して講演。当日の様子は静岡新聞および読売新聞に掲載された。	
		平成 18 年 1 月	達人セミナー in 三島で、講演。	
著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表誌等又は発表会等の名称	概要
<著書> 1. 『NEW LEGEND ENGLISH I 予習ノート』	共著	平成 15 年 3 月	開拓社	（共著者）鈴木英一、江藤秀一。文部科学省検定教科書『NEW LEGEND ENGLISH I』に準拠した予習用教材。Lesson 6 The Green Banana, L. 7 Ardley the Detective, L. 8 How My Career Began, L. 9 Illusion, L. 10 Nature's Way, Further Reading A Mason-Dixon Memory を担当。104 頁
2. 『英語が使える日本人の育成』	共著	平成 15 年 6 月	三省堂	（共著者）渡辺時夫、酒井英樹、他。第 7 章「異文化理解における指導」を分担執筆。（pp.170 ～ 184）平成 14 年 7 月に文部科学省が公表した『『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』の具現化策とも言える理論、MERRIER Approach に則って、まとめられた書籍。①Exposure (to English) 目と耳を通して多量な英語に触れる、②Motivation 学習への関心を示し、意欲を持つ、③Opportunity (for

				using English) 様々な場面で英語を使う機会を持つという3つの視点に立ち、日本人教師がこれらを満たす授業を展開させるための理論と実践の方法について述べている。316頁
3. 『580のイラストで覚える英語表現集』	共著	平成15年6月	(株) 栄光	(共著者) 辰巳順子、落合裕子、木宮暁子。「楽しみながら英語を覚えてほしい。」「英語がすきになるようなわくわくさせる授業をしたい。」と日頃から工夫をこらした授業、生徒が夢中になるようなカードやゲームを作り続けてきた教師が集まって、作成したもの。中でも「異文化理解」や「国際理解」のために役立つものを多く取り上げている。また、英語嫌いをつくりかねない「文法」指導にも、カードをつかった指導を提案。各研修会でその活用法を紹介するよう依頼を受け、同時発売となった『ことわざカルタ』とともに、全国の先生方に利用していただいている。
4. 『SUNSHINE English II Teacher's Manual』	共著	平成16年1月	開隆堂	(共著者) 開隆堂編集部 Lesson 11 The Original of Musical Notes を分担執筆。音符・音階の起源を扱った内容だが、特に歌を使った授業での活動に関するヒントをふんだんに盛り込んだ。227頁
5. 『NEWLEGEND ENGLISH II Teacher's Manual』	共著	平成16年3月	開拓社	(共著者) 鈴木英一、江藤秀一。Lesson 2 Hold That Call!, Lesson 8 Long Walk to Forever を分担執筆。(pp.31~58, pp.243~278) 文部科学省検定教科書『NEW LEGEND ENGLISH II』の教師用指導書。詳細な解説と関連情報の補遺で定評があり、高校英語教員から厚い支持を受けている指導書。496頁
6. 『NEW LEGEND ENGLISH II 学習の手引き』	共著	平成16年3月	開拓社	(共著者) 鈴木英一、江藤秀一。Lesson 2 Hold That Call!, Lesson 8 Long Walk to Forever を分担執筆。(pp.23~44 pp.162~185) 文部科学省検定教科書『NEW LEGEND ENGLISH II』に準拠した生徒用解説書。的確な解説で定評がある。315頁
7. 『NEW LEGEND ENGLISH II 予習ノート』	共著	平成16年3月	開拓社	(共著者) 江藤秀一。Lesson 1 What Happened to Sparky?, Lesson 2 Hold That Call!, Lesson 3 Laughter — Everyone's Language, Lesson 8 Long Walk to Forever を分担執筆。(pp.4~32 pp.74~87) 文部科学省検定教科書『NEW LEGEND ENGLISH II』に準拠した予習用教材。143頁
8. 『異文化理解おもしろクイズ』	単著	平成16年6月	開拓社	言語の背景にある文化の相違への気づきを促す内容が満載の教材。生徒・学生たちが、「へえー、なるほど!」「ふーん、そうなの?」と面白味を感じ、英語やその背景にある文化に対する興味関心を高めてもらうことをねらいとし、主に、生活文化・言語文化の相違に気づくワンポ

				イントクイズやコミュニケーション・ギャップを盛り込んだダイアログ、さらには人種宗教など現代社会が抱える諸問題を扱ったタスクにより構成されています。楽しみながら人と人との関わりの基盤である「コミュニケーション能力」を養うトレーニングにもなっている。84頁
9. 『NEW LEGEND ENGLISH READING』	共著	平成 17 年 3 月	開拓社	(共著者) 鈴木英一、江藤秀一。文部科学省検定教科書。Lesson 8 Sink or Swim および Rapid Reading 1 All Those Notes を分担執筆。(pp.18～28, pp.106～119) 212 頁
10. 『NEW LEGEND ENGLISH READING Teacher's Manual』	共著	平成 17 年 3 月	開拓社	(共著者) 鈴木英一、江藤秀一。Lesson 8 Sink or Swim および Rapid Reading 1 All Those Notes を分担執筆。(pp.113～152, pp.269～300) 文部科学省検定教科書 『NEW LEGEND ENGLISH READING』の教師用指導書。詳細な解説と関連情報の補遺で定評があり、高校英語教員から厚い支持を受けている指導書。520 頁
11. 『NEW LEGEND ENGLISH READING 予習ノート』	共著	平成 17 年 3 月	開拓社	(共著者) 鈴木英一、江藤秀一。Lesson 5 Public Attitudes toward Science, Lesson 8 Sink or Swim, および Rapid Reading 1 All Those Notes, Rapid Reading 2 Pandora, the first Woman を分担執筆。(pp.50～57, pp.55～66, pp.93～105, pp.106～114,) 文部科学省検定教科書 『NEW LEGEND ENGLISH READING』に準拠した予習教材。167 頁
12. 『NEW LEGEND ENGLISH READING 学習の手引き』	共著	平成 17 年 3 月	開拓社	(共著者) 鈴木英一、江藤秀一。Lesson 8 Sink or Swim および Rapid Reading 1 All Those Notes を分担執筆。(pp.105～124, pp.212～241) 文部科学省検定教科書 『NEW LEGEND ENGLISH READING』の教師用指導書。的確な解説で定評がある。378 頁
13. 『NEW LEGEND ENGLISH READING ワークブック』				(共著者) 鈴木英一、江藤秀一。Lesson 8 Sink or Swim および Rapid Reading 1 All Those Notes を分担執筆。(pp.25～29, pp.46～51) 文部科学省検定教科書 『NEW LEGEND ENGLISH READING』に準拠した練習問題用ワークブック。リーディングの特性に配慮し、内容把握とそれに関連する自己表現に力を入れた新しいタイプのワークブックである。75 頁
<論文> 1. 「国際コースに取り組んで」	単著	平成 7 年 11 月	教育研究助成論文集第 5 集 (財団法人静岡県教育公務員弘済会)	常葉学園高等学校に、平成元年に創設された「国際コース」の特色、授業実践、諸活動についてまとめたものである。特に語学合宿、語学研修等の行事、「オーラル・コミュニケーション」の授業は従来の形にとらわれない斬新な企画を実行に移していった点、その結果としてそれま

				では類を見ない大学進学実績、対外模試の成績伸張、英語検定合格実績をあげ、生徒の満足度も高かった点を強調している。PP. 260～266
2. 国際化時代の英語教育	単著	平成8年9月	第12回「金子賞」懸賞論文作品集	昭和50年からの、常葉学園高等学校における外国人講師の導入や、国際青少年音楽祭、短期留学をはじめとする海外交流プログラムの実施状況を振り返り、国際化時代における英語教育のあり方を述べたものである。特に、体験や個々の個性を重視することが柔軟で知的好奇心の旺盛な生徒の育成につながったことを強調している。pp. 77～92
3. 英語教育における国際理解教育の実践とその意義	単著	平成10年9月	第14回「金子賞」懸賞論文作品集	「国際理解教育」の意義と高校英語における実践の可能性を述べるとともに、独自の授業展開について紹介している。また、高校英語教育と共における「国際理解教育」の実情の調査を意図し、出版されている41冊の文部省認定教科書『英語Ⅰ』について扱われているトピックスを分析した。実践例として、人権問題を取り上げた総合的プロジェクト学習の概略を述べ、生徒の活動の記録を添えた。pp. 67～87
4. 高等学校英語教育における国際理解教育の実践 —『国際コース』における、楽しくてためになる総合的アプローチ—	単著	平成10年3月	常葉学園大学大学院 修士論文	英語教育の目標は、「単に言葉の獲得だけでなく、広い視野に立ち、理性的で、しかも愛ある地球市民であり、バランスのとれた言語観と白文化および異文化に対する良識的かつ客観的な認識をもち、その上で、社会に貢献していける人物を育てること」であるという立場に立って、「国際理解教育」の意義を再確認するとともに、勤務校における独創性に富んだ実践報告の数々を紹介している。大学院での勉学・研究を生かした画期的な試みが多く、その後の授業法の研究の基盤となる論文である。192頁
5. 国際理解教育を目指したオーラル・コミュニケーションの授業と活動	単著	平成10年7月	財)日本英語検定協会主催 第11回「英検」研究助成論文部門入選	学習指導要領(高等学校)の外国語教育の総括目標である「外国語を理解し、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深める」を、英語の授業(特にオーラル・コミュニケーション)と学校行事を体系的・有機的に計画、実行した実践報告である。審査委員長である和田稔氏からも、授業だけでなく学校行事を積極的に活用した発想と実践、および、これらの実践をさまざまな角度から確認している点について高い評価をいただいた。pp. 106～131

6. コミュニカティブな外国事情を目指して	単著	平成 10 年 6 月	中部英語教育学会 長野大会にて発表、紀要 Vol.28 に掲載	国際語としての英語を通して‘体験’‘実感’から‘思考’‘発信’を促す、コミュニカティブな「外国事情（高校 3 年生対象）」が豊かな教養と総合的語学力を育む、非常に有望な科目であることを提案している。テーマの設定基準、授業展開の仕方、高校 1・2 年次とのつながり等について述べ、それらが同時にコミュニカティブな「外国事情」が成り立つための条件になっていることも加えている。いくつかの実践例を紹介するとともに、これらの取り組みの結果として認められた模試の成績（受験への対応力）の向上、および生徒たちの知的好奇心の高まりなどについても明示している。pp. 163～170
7. 国際理解教育のための総合的アプローチ『外国事情』の授業法とその有効性ー	単著	平成 11 年 7 月	第 48 回読売教育賞 外国語教育 最優秀賞	勤務校の「国際コース」の 3 年生を対象とした授業の実践報告である。英語に力を入れている同コースでは 3 年次に「英語講読」「オーラル・コミュニケーション C」「外国事情（従来はライティングと入試対策としての演習であった）」の 3 科目を履修しているが、この 3 科目につながりを持たせ、それまで学んだ英語のすべてを盛り込んだ総合的科目と捉え、「国際理解教育」の実践を目指した。授業は、テーマに沿って英文を読んだり、映像による情報を提供する‘Introduction、外国人教師の協力を得て英語で意見交換をする‘Information Exchange’、そして、エッセイ、スピーチ等の形で自分の意見や感想を発信する‘presentation、の 3 つの段階を追って進める。期せずして、この後、文部省から打ち出された「総合的学習」の英語版となっており、審査委員長天満美智子氏からは、「この種の素晴らしい実践は、一部の学力の高い生徒を対象にしたものが多いが、いわば平凡でおとなしい生徒たちが変容を遂げていく姿に感動を覚えた。」とのコメントをいただいた。pp. 121～142
8. 異文化理解を促す教材の開発とその実践	単著	平成 11 年 6 月	中部英語教育学会 静岡大会にて発表、紀要 Vol.29 に掲載	「異文化理解教育」の効果、すなわち、‘言語や文化に対する関心を高め、国際協調の精神を育成する’ばかりでなく、次世代を担う若者たちの人格形成に大きな効果があることに着目し、生徒の感性に触れ、興味を抱かせることに力点を置いた、楽しくアクティブなクイズ形式の自作教材の紹介とそれを利用した授業実践について報告する。既存の文部省認定教科書『オーラル・コミュニケーション A・B』の内容分析をおこなった上で、現状では十分に扱われているとは言い難い、言語・文化の違いから生じるコミュニケーション・ギャップやミス・コミュニケーションに

				スポットをあて、その原因を考えさせる形式とし、異文化ばかりでなく白文化への気づきを促すことも強調した。pp. 347～354
9. 異文化への気づきを促す教材の工夫	単著	平成 11 年 11 月	第 47 回全国私学教育研究集会 静岡大会研究集	第 47 回全国私学教育研究集会の英語科部会パネルディスカッション「今、人間教育としての英語教育の役割」で、学習院女子中高等学校の八名まり子氏、富山第一高等学校の坪田俊克氏とともにパネラーをつとめる。それまでも、一貫して「人間教育」につながる英語教育のあり方を模索し、異文化理解教育に注目しながら実践を繰り返しており、まさにテーマに即した発表となり、好評を博した。研究の理念だけでなく、目標の具現化には欠かせない数多くのオリジナル教材を紹介し、生徒が楽しく意欲的に取り組める・授業の大切さを力説している。pp. 389～398
10. "Young People Today"－現代社会を見つめる「外国事情」における総合的アプローチ	共著	平成 12 年 1 月	(財)はごろも教育研究奨励会主催 第 14 回はごろも教育研究奨励賞、論文集に記載。	3 つの目標、すなわち、「人間教育」につながる「外国語教育」の実践、「総合的学習」への試み、「調べ学習」「生涯学習」への手がかりを掲げた、高等学校英語教育における研究報告である。この年、発表された学習指導要領改定案の要旨にある「国際理解、情報、環境、福祉、健康などの課題について横断的・総合的な学習活動」の重要性に配慮し、「調べ学習」にも力点を置いている。「図書館を利用して学び方を学ぶ」といういわゆる「調べ学習」の強化に備え、自ら司書教諭免許を取得し、勤務校の図書館の拡充に取り組みながらの実践報告である。最終的には、英語でのスピーチ、ディベートを行う一連の総合的アプローチには、英語の 4 技能はもちろん、情報を柔軟に受け入れ、それらに対し自らの意見を発信できる態度が必要であること、そして、これらの技能と態度は、まさに学習指導要領改定案に掲げられた「実践的コミュニケーション能力」である。
11. 「実践的コミュニケーション能力を育成する教材の開発と授業実践－『異文化理解おもしろクイズ 100 / ホップ、ステップ、ジャンプ』－	単著	平成 12 年 6 月	中部英語教育学会 金沢大会にて発表、紀要 Vol.30 に掲載	本論文は、「実践的コミュニケーション能力」の育成に欠かせない「異文化理解」を促す教材の開発とそれを利用した授業実践について述べたものである。まず、最初に、「異文化理解」を促す英語教育の意義を確認し、自作教材『異文化理解おもしろクイズ 100 / ホップ、ステップ、ジャンプ』を作るに至った経緯を述べている。次に、生徒の活動を促す各種の教具の開発にも力を注いだので合わせて紹介している。最後にまとめとして、これらの取り組みの結果として認められた生徒

				たちの知的好奇心の高まり、学力の向上などについて触れ、進行中の教育改革の趣旨の一つ「生きる力」の育成にも通じることを強調している。pp. 71～78
12. 自立した読み手を育てるリーディング指導ースキーマの活性化を促す『異文化理解なるほどリーディング』	単著	平成 13 年 3 月	第 49 回中村英語教育賞 3 位 入選 開隆堂『英語教育』Vol.52 に掲載。	それまで、異文化への気づきを促す授業展開、教材・教具の開発に力を入れ、何より生徒が関心を寄せる面白みのある情報を提供することに重点をおいてきたが、ここでは、次のステップとして、学習者である生徒を主体とした活動ができるようにさせたいと考えた。学習者中心の教育活動として、着目したのが、個人活動と言われる「リーディング」である。「リーディング」を通して、様々な知識を自らの世界へ取り込み、何かを感じ、思考することにより、コミュニケーションの源となる意思を持つよう促し、リスニング、スピーキング、ライティングという他の 3 技能の積極的利用につながる‘自立した読み手’の育成を目指している。「リーディング」は、学習者主体の個人的な活動であるため、学校教育の場でどのように扱うかについては問題点も多く、これ以後も研究課題としている。
13. スキーマの活性化を促す「異文化理解なるほどリーディング」	単著	平成 13 年 6 月	中部英語教育学会 愛知大会にて発表、紀要 Vol.31 に 掲載	学習者のより主体的な活動を促す試みとして「リーディング」に着目した独自の実践の報告である。自らの先行研究を参考にした上で、‘異文化すなわち未知の情報への気づきは学習者に満足感を与え、英語学習に積極的な態度をもたらす’という点を生かしたリーディング指導である。名付けて「異文化理解なるほどリーディング」。すなわち、「スキーマ理論」に基づき、類似のトピックスを、より易しい英文から順に提供することによって、学習者のスキーマを徐々に膨らめ、より主体的な読みを身につけさせようというものである。読みの速度と理解度の伸張、および「リーディング」に対する意識の変化、また、採用した pre-reading, While-reading の活動の有効性にも触れている。 PP. 121～128
14. 「異文化理解」を促す総合的アプローチと学習者の変容	単著	平成 14 年 6 月	中部英語教育学会 福井大会にて英語で発表、紀要 Vol.32 に掲載	「異文化理解教育」の可能性に期待を寄せ、授業に工夫を重ねて 10 年におよぶ実践から、英語力の向上ばかりでなく、人間教育的側面にも注目し、その有効性を強調している。学年に応じて、「異文化を楽しむ」授業から「異文化間の諸問題を考える」授業へと、テーマを変化させながら、学習者の知識、態度、技能を総合的に伸ばすことを目指している。アンケートの結果を示し、異文化に対する知識・態度・技能に関する学習者の変容ぶり、すなわち、知的好奇心や現代社会に

				対する問題意識が高まっていることも付け加えた。なお、口頭発表は All English でおこなった。PP. 185～192
15. コミュニケーション授業の実践とその評価	単著	平成 15 年 6 月	中部英語教育学会 岐阜大会にて英語で発表、紀要 Vol.33 に掲載	これまで、主に授業展開や自主教材の開発を中心に、異文化理解を促す英語教育についての研究・実践してきたが、本論文では、特に、「評価」のあり方、「評価方法」に焦点を当てている。改めて言及するまでもなく、ペーパーテストの点数の良い生徒がコミュニケーション能力が高いとは限らない。「実践的コミュニケーション能力」の育成が目標である以上、そのためのより良い授業実践のあり方、「評価」のあり方を検討し、可能な限りの確で、生徒にも納得がいき、しかも実行可能な「実践と評価」が積み重ねられていくことが求められる。文献に当たり、評価法を再検討し、言語能力ばかりでなく、人間力の変化・向上の評価を試みたことにより、教師・生徒の双方にとって納得のいく評価、その後の教育活動の内容と意欲を高める評価へと一歩近づくことができたことを強調している。PP. 401～408
16. 英語教育の目的は何か—中学・高校の生徒と教師へのアンケート調査から	単著	平成 16 年 6 月	中部英語教育学会 富山大会にて英語で発表、紀要 Vol.34 に掲載	本論文は、愛知・石川・静岡県内の中高校生、大学生および教員を対象とした「英語教育の目的」に関するアンケートの結果報告とその分析である。学習指導要領に謳われた「実践的コミュニケーション能力の育成」、さらに近年、戦略構想が打ち出された「英語が使える日本人の育成」などは、英語教育の目的として耳になじんだ表現である。しかし、実際には、「英語教育の目標は何か」という問いに対する共通理解を得られぬままの状態にあり、依然として迷いや疑問を抱えながら教鞭をとる教師、目的意識の希薄さから学習意欲が高まらない生徒が少なくない。「英語コミュニケーション活動研究」プロジェクトのメンバーの協力を得て、1528人を対象にアンケートを実施し、その結果から「英語教育への期待」を読み取り、生徒と教員の双方が納得し、それゆえに動機付けにもつながる「英語教育の目的」を提案している。pp. 289～296

<p>17. 常葉学園内における英語教育の連携の可能性を模索して ―英語教育の目的および早期英語教育に関するアンケート調査から―</p>	<p>単著</p>	<p>平成 16 年 12 月</p>	<p>常葉学園短期大学紀要第 35 号</p>	<p>本論文は、常葉学園内の学生・生徒および教員、1927人を対象とした「英語教育に関するアンケート」の結果報告とその分析である。前年に続き、学園夏期研修会において学園内の「連携」がテーマとなり、様々な視点からの「連携」が考えられるが、ここでは特に「英語教育における連携」の可能性を検討している。その第一歩として、<u>英語学習の目的と授業への満足度</u>および<u>早期英語教育</u>の2点に着目した英語教育に関するアンケートを実施し、その結果を分析することにより、いわゆる進学校と共通する目的だけでなく、生徒・学生の実態や要望に応える本学園独自の目的意識を持つことの必要性、早期英語教育を踏まえた中高への連携への期待を述べている。16頁</p>
<p>18. 英語による「異文化理解」授業の可能性</p>	<p>単著</p>	<p>平成 16 年 12 月</p>	<p>旺文社『英語教育 Interactive』Vol.18</p>	<p>旺文社の教育雑誌『英語教育 Interactive』の特集企画、「やってみよう、異文化理解の授業」の一環として、効果的な実践例を紹介。一口に「異文化理解教育」と言っても、その範疇には様々な要素が含まれる。すなわち、①文化の相違を踏まえた行動・言動がとれる能力（つまり「実践的コミュニケーション能力」）を養う助けとなる。②意味のあるコミュニケーション、おもしろみのあるコミュニケーションの鍵となるトピックとして、絶好のネタとなる。③未知の事柄に対し、興味を持つとする姿勢、つまり「異文化理解的な構え」こそ「学び」である。④私たちの一生は「異文化とのコミュニケーションの連続」である。日本語を含むコミュニケーション能力こそ、他者と関わりながら生きていく力、「生きる力」である。以上の観点から「異文化理解」教育の大きな可能性を強調し、有効な指導法の一例を紹介した。</p>
<p>19. 短大生の「話せるようになりたい」に応えるには</p>	<p>単著</p>	<p>平成 17 年 6 月</p>	<p>中部英語教育学会 山梨大会にて英語で発表、紀要 Vol.35に掲載</p>	<p>人間形成と、他者とのコミュニケーションに焦点を当て、英語授業で「意味あるコミュニケーション活動」を展開することを目指した実践報告である。学生の英語学習に対する目的意識、学習習慣等を調べた上で、先行研究を踏まえ、論理的根拠に基づいた実践を行った。①興味・関心の持てるトピックについて、②楽しくテンポのよい活動をすることにより input の量と効率を上げ、③頭の中を整理し英語で表す準備の時間を設けた上で、自分の意見や感想を表現する。④また、学習者としての「自立」を目指し、⑤自己評価を重視する、というもの。母語話者との対話の様子を録画したビデオの分析、学生への授業評価から、自己表現へ</p>

				の意欲が喚起されたという者が大多数を占めた。
20. Learner Training — How to support the students in making progress towards becoming independent learners — ラーナー・トレーニング — 自立した学習者を育てる支援プログラム —	単著	平成 17 年 12 月	常葉学園短期大学紀要第 36 号	本論文は、本学の学生（1 年生 26 名）を人を対象とし、授業の一環として行った「英語学習支援プログラム」の実践報告とその分析である。まず、文献にあたり、学習者論、第二言語習得論などを参考にアンケートを作り、英語学習目的を確認させ、その時点での英語力の自己評価をさせた。また、様々な学習法を紹介した。その上で、各自にとってより効果的な学習方法を探りながら学びを進めていく「自立した学習者」への成長を奨励した。
Ⅲ. その他 1. 口頭発表 「異文化理解」を促す教材の開発とその授業法 —『異文化理解おもしろクイズ』と“オリジナルかるた”—	単	平成 12 年 6 月	JASTEC（日本児童英語教育学会）中部支部研究大会	JASTEC（日本児童英語教育学会）の会長と なった中山兼芳先生より、推薦をいただき、発表の機会を得た。勤務校における、カルタやビジュアル・レイアウトを積極的に使った授業方法は、児童英語の世界にも共通するものであり、好評を得た。特に、児童英語にはない切り口のおもしろさや「国際理解」「異文化理解」の要素に関心を持っていただいた。
2. 口頭発表 小学校と中高等学校との連携の可能性を探る一付属橋小学校卒業生のアンケート調査と出前授業の試み	共	平成 15 年 10 月	JASTEC（日本児童英語教育学会）第 23 回全国秋季研究大会	英語教育における「小中高大一貫教育」の可能性を探るべく、幼稚園から大学院までを有する常葉学園において、英語教育に関する生徒・学生および教員の意識、付属橋小学校で英語を学んだ卒業生の児童英語教育への評価などについてアンケート調査をおこなった。連携への課題として、児童英語教育に対する意識のズレ、各段階における英語教育の目的意識の違い、あるいは評価方法の違いが浮き彫りとなった。また、連携の可能性を探る際には、教員の相互理解と協働と実践に向けたさらなる調査・研究が不可欠だが、今回、小中高大の教員が協力して調査にあたったことは有意義であった。
3. 口頭発表 短大生の「話せるようになりたい」に応える指導法とは	共	平成 17 年 12 月	LET（外国語教育メディア学会）中部支部第 66 回秋季研究大会	本発表は、女子短大生の実態に配慮した実践の経過報告である。英語学習の目的を尋ねると、大多数が漠然と「英語を話せるようになりたい」と答える学生たちに、どのような働きかけ、どのような指導法が必要であり、かつ有効なのかを探る。まず、アンケートにより、学生の英語学習に対する目的意識、学習習慣等を調べた上で、以下の 2 点に留意した取

			<p>り組みを行った。</p> <p>①「ラーナー・トレーニング」を通して、学習者としての自立の必要性を説き、英語学習の目的、学習方略を意識させる。</p> <p>②関心の持てるトピックスについて、表現の必然性、活動の具体性、自己関連性に配慮した活動をさせ、「意味あるコミュニケーション活動」をおこなう。</p> <p>これらにより、学生は学習の自己管理を心がけ、教師と学生の協働により、学習者主体の授業が展開するようになるのか、そして、英語によるコミュニケーション能力が向上するのかを検証した。</p>
--	--	--	--